



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.265

2025.10.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと

ひたちなか市史跡虎塚古墳等の調査と保存

鴨志田 篤二

第5回 ◆ 馬渡埴輪製作遺跡の調査と全容の解明(3) ◆

4カ月前に終了したB地区の調査は、工房址の新発見遺構を確認し、さらに鉾の宮古墳群の2基の古墳から出土した埴輪は、その後の埴輪研究に重大な資料を残した。調査の終了は、その都度地元の関係者や調査団との別れがあり、ささやかではあったが宴が催され、今後のさらなる調査への期待をつないだ。宿泊施設の研修所の清掃や雑巾がけは当たり前のように行われ、そして駅に向かうのである。駅前では、キスリングに馬渡埴輪製作遺跡B地区調査参加・日付などをマジックで黒々と書き込み、駅頭で全員肩を組み、明大校歌を歌い、「舟塚古墳の調査には来いよ!」などと声を掛けられ、調査団は車中の人となった。

A地区2次調査は、1965(昭和41)年8月8日から始められた。調査の開始にあたって大塚は、前年の調査で確認した9基の窯址を地上に白線で示し、馬渡埴輪製作遺跡の中枢部と目した区域にトレンチを設定して調査を開始した(下図の全掘部分は昭和41年度調査区域)。縦横にトレンチを設定し、遺構が検出したら全面を剥いで徹底的に遺構を確認する。そして排土は、すべて東・西の遺構外に人力で運搬し、A地区の遺構を追求した。この結果、東西約50m、南北約30mの表土を剥いて全面調査となる。

A地区2次調査では、住居跡2、工房址8、粘土採掘坑16カ所以上の多くの遺構を検出したが、それらは複雑に重なり合っており、調査員を悩ませながらの発掘作業が進行する。酷暑のなか、炎天の下で一生懸命に調査に励む姿は「馬渡地獄」と称された。竪穴遺構の北壁に竈を付設した竪穴を住居址としたが、それ以外は全員が初めて経験する遺構であった。

1号住居址はA地区の東端に位置する。4号窯址の窯尻からわずかに1mという至近距離に存在した。住居址は南北4.8m、東西4.0m、北壁中央部に竈を設け、焚口周辺には甕・甔・鉢形の土師器が出土した。北西隅に粘土貯蔵穴も検出され、底面には青白色粘土が認められた。また、床面からは鉄製鋤先や手づくね土器が18個すべてが完形品で出土した。

第2号住居址はA地区の南西端に位置し、1号住居址とは東西に対向する位置関係から検出された。本住居址も北壁中央に竈が設けられていたことから住居址とした。東側から北側は複数の粘土採掘坑によって切り取られていた。調査によって住居址と確認されたものの、1年の調査では解明できず、2年継続で調査してその全容の解明に当たった。本遺構からは竈周辺に20個体の土師器が

発見され、第1号住居址と同様な手づくね土器が4個出土した。

現地には毎日のように報道関係者が訪れ、全国で初めて埴輪工房址が出土したことをコメントし、新聞紙上を賑わす。大塚は「明治以来古墳の研究が盛んになり、学術的に調査済みの窯址は全国で11カ所あるが、工房は初めて。作業場、住居の建物、原料ネンドの穴なども出てきているから、ハニワ生産の実態生産の実態を究明することができよう。調査は成功裏に進んでいる」と話しており、月末には航空写真を撮るため、自衛隊のヘリコプターを要請するなど、官民一体となって調査に協力していることを話す。

さらに「今回の工房跡の発掘調査で、東京女子大学で西洋古代史を講義している三笠宮殿下や、東大、中央大学の考古学教室からも近く調査に訪れる予定になっている。」と結ぶ。事実、現地では、そのためのゲートを作ろうとする機運も持ち上がり、筆者らは杉の枝を切り、飾り付けまで行ったが完成までには至らなかった。

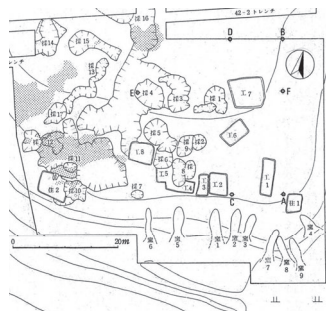
調査団は、『昭和41年度日本考古学年報19』『第I部学界の趨勢』の古墳時代のなかで小林三郎は「冒頭に土木工事に伴う緊急調査の危機をしながらも、埴輪関係では茨城県勝田市の馬渡遺跡の調査が行われ、A地点では前年度から引き続いた調査で、窯址に接する平坦地で工房址と考える竪穴群と、粘土を採掘したと思われる遺構を確認した。これらの遺構内には土師式土器が含まれており、その時期は鬼高式土器の範疇に含まれる」と報告する。

また大塚初重は同書「第III部発掘および調査」のなかで、「茨城県馬渡埴輪製作遺跡(第3次調査)、A地区において、昭和40年夏に調査した窯址9基に接した北側台地を発掘区域とした東西50m、南北30mを調査した。その結果、総計18個の竪穴を発見し、これらが埴輪製作に関係のある遺構であったのを確認する。すなわち18個の竪穴のうち第1〜7,14,18号は長方形を示し20cm前後を掘りくぼめ、柱穴4カ所のものであった。第1,18を除いていずれも竈の付設がなく、しかも床面に粘土塊、焼土、木炭および土師器、埴輪片などが認められ、埴輪製作の工房址と考えられる」と報告しているが、小林・大塚両者とも粘土採掘坑の名称は用いていない。1次調査で確認した窯跡を白線で書き、その北側一面に遺構が広がる航空写真を添付している。

その写真を見ると、9基の白線で描かれた窯跡の北側の台地上には遺構が全面に展開し遺構には、調査員を配しているのがわかる。

調査最終日の午後、埋め戻し作業が終了した。僅かの時間にゲームに興じていた調査員のもとに、地元関係者の挨拶から帰った大塚初重の雷が落ちた。それは一瞬のことであり、その後、現地では大塚の持参したビールで慰労と次回のさらなる調査の成功を祈念する宴があり、調査は終了した。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。



目次

■故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと(第5回)	鴨志田篤二 …1
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む(第23回)	山本暉久 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第257回)	岩 佑哉 …3
■考古学者の書棚「埼玉県東部地区の奈良時代・平安時代」	鬼塚典典 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第23回)

山本 暉久

23. 神奈川県職員としての考古学 その7
県立埋蔵文化財センター職員として

今回は、財団設立以前の県立埋蔵文化財センター職員として従事した遺跡の調査やそのころの自身の研究と1989(平成元)年5月に立ち上げた「縄文時代文化研究会」(代表鈴木保彦)創設の経緯について触れてみよう。

まず、自身が調査を担当した二つの遺跡を取り上げてみたい。一つは、1987年(昭和62)6～12月と1988(昭和63)年5～6月にかけて二次にわたって実施された横浜市金沢区金沢文庫遺跡の調査である。国指定史跡「称名寺境内」内にある県立金沢文庫(1930(昭和5)年建設)が老朽化したため新設する計画となったが、境内地は史跡整備事業の関係上、その場での建替は困難であったため、新たな建設候補地として、称名寺境内に隣接する西側の谷戸にある県立社会教育会館(1987年3月廃館)敷地内が選ばれることとなった。しかし、当該地は、古くから「文庫ヶ谷」と呼ばれ、かつての金沢文庫(金沢北条氏の北条実時により1275年ころ創設)の跡地と考えられており、敷地は、史跡として1972年追加指定されている場所でもあった。このため、この地が金沢文庫跡地かどうかを明らかにさせるため、県文化財保護課が窓口となって「金沢文庫跡発掘調査団」(団長・荒木伸介)により1984(昭和59)年11月と1985(昭和60)年11～12月にかけて、敷地内およびその隣接地が試掘調査され、敷地南西部に土丹(どたん、泥岩質の堆積岩)塊を敷き詰めた「地業面」が広がっていることが確認され、かなり広範囲に建物の基盤となる「地業面」が存在することが明らかとなった。こうした経緯を受けて、文化庁との協議を重ねた結果、この地に県立金沢文庫が新設されることとなり、県立埋蔵文化財センターにより事前の発掘調査が実施されることとなったのである。調査の結果、予想どおり土丹敷き地業面が調査区南西隅に広範囲に検出され、それに付随するように、称名寺境内地とを繋ぐ「洞門」(掘削された隧道)とを結ぶ土丹敷の通路や金沢文庫の屋根を葺いていたと思われる瓦の廃棄場所である瓦溜りなども検出され大きな調査成果をえることができた。おそらくはこの地にかつての金沢文庫が存在していた可能性が強いことが明らかとなった。

二つ目は、1988(昭和63)年10月～1989(平成元)年3月にかけて実施された小田原市三ツ俣遺跡F地区の発掘調査である。東海道本線国府津駅から15分ほどにある三ツ俣遺跡はこれまでの調査により、弥生～古墳時代・古代・中近世にいたる大規模な複合遺跡であることが明らかになっていた。都市計画道路穴部国府津線街路整備事業にかかる調査のうち、F地区とした箇所が調査対象地であった。調査対象面積は約750m²と狭いことから、調査は短期間で終わるものと判断していたが、井戸



▲三ツ俣遺跡F地区石組遺構

址を伴う東西約6.5×南北約8.3mの範囲に大小の川原石を敷き詰めた7世紀中葉～末葉の古墳時代の石組遺構(写真参照)が検出されたことにより、調査期間が

大幅に延長され、約6箇月間を要する調査となってしまった。このように遺跡の調査というのは、予期せぬ発見もあるのがなんといっても醍醐味でもあり、同時に自身の「引きの強さ」も感ずるのであった。



▲同井戸址 「三ツ俣遺跡II(F地区)」2000より

さて次に、この頃の研究について少し触れておこう。1976年2・3月に「古代文化」誌上に「敷石住居出現のもつ意味」を発表(「アルカ通信No.257」にその経緯を記した)して以降、次は、敷石住居の終末段階について考察することを考え検討を重ねてきたが、ようやく、1987(昭和62)年1月～4月にかけて、「敷石住居終焉のもつ意味」と題する論文を4回にわたって「古代文化」第39巻1～4号に連載することができた。こうして敷石住居の出現から終末に至る過程を自分なりにまとめることができた。

最後に、縄文時代文化研究会の創設の経緯について触れておこう。鈴木保彦・戸田哲也らと神奈川考古同人会の縄文研究グループとして縄文時代中期後半と早期末～前期初頭のシンポジウムを開催してきた(「アルカ通信」No.259で触れた)が、そのような活動を通じて、時代を限った研究会を立ち上げようと提案し、全国の縄文時代を研究する若手研究者に呼びかけることとなったのである。イメージは、かつての「石器時代文化研究会」の機関誌「石器時代」であった。この研究会は短命ではあったが、掲載された論文や報告は今も価値は高い。それと、雑誌「縄文時代」に掲載されているその年の学界動向と文献目録は、かつての東京考古学会の機関誌「考古学」誌上、森本六爾が中心となって編んだ「考古学年報」と「考古学文献総目録」をイメージしたものであった。

こうして1989(平成元)年5月に設立総会を開催し、全国各地から趣旨に賛同した111名の会員が発足時に名を連ねた。この会の特色は、会費制とはらず、会の趣旨に賛同した会員の出資金の拠出により会を運営する方式をとったことである。また、新会員の資格は問わないが、縄文時代研究に業績をもつ者で、かつ会員の推薦と総会の承認を必要とすることとした。翌1990(平成2)年5月に会の機関誌「縄文時代」創刊号が刊行されるに至った。爾来36年が経ち、2025(令和7)年5月には第36号を刊行するまでの歩みを重ね、会員も211名となっている。名実ともに縄文時代文化を研究する中心の研究組織に成長した。

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月～1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月～2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英之記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月～2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工桑善通先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 257

上粕屋・秋山遺跡第2次調査 ～神奈川県伊勢原市

岩 佑哉

はじめに

伊勢原市は、神奈川県ほぼ中央を南流する相模川のすぐ西側に位置します。市域北西部には、丹沢山地の主峰のひとつである大山がそびえています。大山は、古くは奈良時代から信仰の対象とされてきました。特に江戸時代になると、江戸方面からの距離的な近さや、歴史的由緒が契機となり、関東一円をはじめとした幅広い人々に大山詣りが親しまれるようになります。現代においても、大山は多くの登山客から人気を集めます。

遺跡は、大山に端を発する鈴川が形成した上粕屋扇状地上に所在します。扇状地の東側縁辺部には渋谷川が流れています。細かな支流からなる渋谷川は複数の谷戸を形成し、谷戸に挟まれた部分は台地となります。こうしてできた台地上に遺跡は立地し、特に台地平坦部から緩斜面部にかけて、近世から旧石器時代までの遺構・遺物が濃密に確認されています。

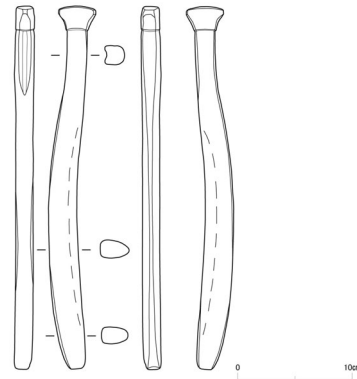
第2次調査は平成28年度に開始されました。その後、一時中断する期間を含みますが、令和7年度も調査を継続しています。その中の8区は令和4・5年度に調査され、縄文時代後期の成果が特筆されます。

縄文時代の調査成果

8区では、後期前葉～中葉(堀之内2式期～加曽利B1式期)を中心とした集落跡が発見されました。当該時期の集落は、南東に向かって緩やかに下る台地斜面上に形成されています。斜面上側は居住域となっており、敷石住居跡が3軒見つかりました。3軒とも炉から張出部にかけて、石が敷かれます。そのうちの1軒には環礫方形配石遺構が伴い、構成礫には被熱した痕跡が確認できます。住居はいずれも同斜面下側にある配石遺構群の方へ、出入口が向けられます。住居跡は斜面に対し横に並ぶように展開しており、一部には住居間を連結するように列石が存在しています。

8区では配石遺構群が3群確認されており、合計して約1,570点の礫から構成されます。そのほとんどが遺跡周辺で採取できる石材で、平均的な大きさは約20～50cm、重さは約20～40kgです。J1号配石遺構群は10m四方の範囲におよび、8区では最大規模を誇ります。立石や平石を組み合わせ、方形の区画が連続して見えるような配置が特徴です。細部を観察すると立石1基に対し、平石1基が側に置かれ、それらを小・中型礫で取り囲む構造がいくつかに共通します。この構造は上述した列石の一部にも共通して認められました。

配石遺構群周辺では遺物はあまり出土しませんが、J1号配石遺構群から完形状態の石刀が1点出土しています。この石刀は柄頭部が三角形を呈していること等から、東北地方北部を中心に分布する葦内(しだない)型石刀であると考えられます。葦内型の特徴をよく備えた石刀が完全な状態で出土することは関東地方では非常に珍しいです。石材は、岩手県北上山地で採取できる粘板岩と推測されます。そのため、この石刀は遺跡周辺で製作されたものではなく、東北地方から搬入されたものであると



▲石刀の実測図(吉澤2024『上粕屋・秋山遺跡』「年報」30、公益財団法人かながわ考古学財団より)



▲遺跡解説動画がご覧いただけます。

考えられます。

配石遺構群が発出された場所を20cm程掘り下げると、土坑群(合計約60基)が発見されました。土坑の大きさは長軸が約160～200cm、短軸が約80～90cm、深さが20～30cmで、ちょうど成人が足を伸ばした状態で入れるほどです。また、土坑の覆土を観察すると、内部を埋め戻した痕跡が確認できました。そのため、土坑は当時の墓と考えられます。覆土中からは加曽利B1式の鉢形土器や舟形土器が出土しており、これらは副葬品と推定されます。墓の形態は土坑墓と配石墓の2種類に大別できます。前者は地面を掘りくぼめるだけですが、後者は土坑内部に石が置かれます。ほとんどの配石墓は土坑のどちらか一端または両端に石材が置かれますが、石棺状に礫が全周するタイプが1基のみ見つっています。

おわりに

集落は居住域と墓域に大きく分けられ、配石遺構は下層にある墓域との関係性から祭祀的な性格を有する施設と考えられます。そのような遺構から出土した石刀も、やはり祭祀・儀礼的な道具と考えられます。このように、本遺跡は当該時期の集落構造だけではなく、祭祀・儀礼行為や地域間交流等を考えるうえで非常に重要な遺跡であるといえます。遺構を構成する礫は比較的良好に遺存していたことで、当時の人々が見ていた景観をほとんどそのまま映し出します。遺跡に立つと、約4,000年前の空気感を肌で感じることができ、とても感慨深いものでした。

本遺跡では縄文時代後期の他にも、中期後葉の集落跡も見つっています。さらに近世の屋敷跡と考えられる遺構群や、旧石器時代における槍先形尖頭器の石器製作址等も発見されています。今後も調査は続きますので、新たな調査成果にもご期待ください。なお、8区で出土した遺物は「発掘された日本列島2025」にて展示しております。巡回展示ですので、それぞれの会場と会期をご確認のうえ、多くの方々にご覧いただけますと幸いです。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは齋藤 葵さんです。

考古学者の書棚

『『埼玉県東部地区の奈良時代・平安時代』東部地区文化財担当者会報告書第9集』

東部地区文化財担当者会(2024)

鬼塚 知典

名にし負はば いざ言問わむ 都鳥
わが思ふ人は ありやなしやと

平安時代に書かれた伊勢物語では、主人公の在原業平が京から遠く離れた東国を訪れる光景がかかれる。「武蔵の国と下つ総の国との中に、いと大きな河あり。それをすみだ河といふ。」冒頭の歌は、「すみだ河」のほとりで、業平が京に残した恋人を思い詠んだ歌である。

埼玉県東部15市町(行田市、羽生市、加須市、久喜市、幸手市、杉戸町、宮代町、白岡市、蓮田市、春日部市、越谷市、松伏町、吉川市、八潮市、三郷市)の文化財担当者で構成される東部地区文化財担当者会では、地区内の奈良時代・平安時代の考古学成果をまとめた『埼玉県東部地区の奈良時代・平安時代』を刊行した。埼玉県東部地区には、律令期に制定された武蔵国と下総国の境界である「すみだ河」が流れ、武蔵国埼玉郡、下総国葛飾郡が南北に長く設置される。地区内に官衙遺跡は未だ確認されていないものの、奈良時代の遺跡はのべ206遺跡、平安時代の遺跡はのべ266遺跡あり、近年、新しく発見され大きな調査成果をあげている遺跡もある。

『東部地区の奈良時代・平安時代』は、下記のように構成される。

1. 東部地区の奈良時代・平安時代の遺跡の概要
2. 住まいと建物
3. 道具
4. いのり
5. エピローグ

「1. 東部地区の奈良時代・平安時代の遺跡の概要」は、「地区内の地形」、「河川」、「河川が作った地形」からなり、それらを踏まえうえて「各市町の奈良時代・平安時代の概要」をまとめている。埼玉県東部地区には、大宮台地、下総台地、妻沼低地、加須低地、中川低地が含まれる。特に中川低地には、河川が集中し、利根川東遷前には、蛇行する複数の大河川が東京湾に向け、流下していたと考えられる。これら河川によって形成された自然堤防は、古代の遺跡立地とも密接に関係する。また地区内、加須市から越谷市までの範囲に24か所残る河畔砂丘は、利根川が運んだ砂が河原にたまり、偏西風によって川の東岸か南岸に巻き上げられて形成されたものである。東部地区の河畔砂丘は、平安時代から中世にかけて形成されたと推定されており、河岸に砂丘を残す会の川や大落古利根川、古隅田川、元荒川などの河川は、砂丘形成期に利根川が流れたと推定される。古代の国境河川「すみだ河」は、現在の河川名では、渡良瀬

川から大落古利根川、古隅田川(さいたま市・春日部市)、元荒川、中川、古隅田川(足立区・葛飾区)、隅田川へ流れるものと推定される。業平はこのいずれかで、冒頭の歌を詠んだものと思われるが、江戸時代以来の業平伝承は、春日部市と墨田区に残る。

「2. 住まいと建物」は、「竪穴建物」、「役所と掘立柱建物」からなる。「竪穴建物」では、地区内の竪穴建物の規模やカマドについて考察した。「役所と掘立柱建物」では、掘立柱建物の検出例を把握したうえで、地区内に存在したと考えられる埼玉郡家の場所について、官衙関連遺物の出土状況とともに検討した。その結果、埼玉郡の北西端である熊谷市や行田市にあったのではないかと推定した。

「3. 道具」は、「古代の土器」、「須恵器の流通」、「墨書土器」、「土師器焼成坑」、「鉄の道具と鉄作り」、「織物生産と紡錘車」からなる。「須恵器の流通」では、地区内出土須恵器の産地を、遺跡ごとに北部・中部・南部に分けて統計的にまとめ、傾向を分析した。一河川の対岸に立地する遺跡同士でも産地傾向が大きく変わる事例が複数認められ、須恵器の輸送経路が舟運だけではないことや産地と消費地の特別な関係があった可能性を指摘した。「土師器焼成坑」では、地区内の約90基の土師器焼成坑を検討した。加須市水深遺跡では、埼玉県内最多の65基の土師器焼成坑が確認されているが、このほかにも地区内の複数の遺跡から土師器焼成坑が検出されている。「鉄の道具と鉄作り」では、地区内の製鉄関連遺跡を検討し、8世紀前半と9世紀後半が製鉄遺跡のピークであることをつきとめた。「織物生産と紡錘車」では、地区内で出土した紡錘車の紡錘車の材質、直径、厚さを検討した。

「4. いのり」では、「仏教関連遺物」と「火葬墓」をとりあげた。「仏教関連遺物」では、行田市馬場裏遺跡の瓦堂や春日部市貝の内遺跡の下総国分寺瓦、羽生市茂手木遺跡や春日部市浜川戸遺跡の「寺」と書かれた墨書土器を紹介した。「火葬墓」では、地区内で複数検出されている火葬墓のほか、昭和41年ごろ、行田市で発見された二つの7世紀代の須恵器蔵骨器の利用された年代をめぐる、栗原文蔵氏と坂詰秀一氏が『埼玉考古』誌上で議論したことを紹介した。

巻末のエピローグには、地区内の展示施設を紹介したスポットガイド、奈良時代・平安時代の考古学用語集、地区内の奈良時代・平安時代の遺跡および関連文献一覧を掲載している。カラー写真、イラストをふんだんに利用し、考古学初学者でも理解しやすい誌面を目指した。A4判オールカラー133頁、頒価2,000円。お求めは、六一書房(<https://www.book61.co.jp/>)まで。

アルカ通信 No.265

発行日 2025年10月1日
企画 角張淳一(故人)
発行 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL: <http://www.aruka.co.jp>